

# 河川環境欧州調査(ロワール川・セヌ川)報告



前 研究第四部 主任研究員 高比良 光治

## 1. はじめに

2005年10月13日(木)～22日(土)かけて高橋裕東京大学名誉教授を団長とする河川環境欧州調査(11名の調査員ほか通訳1名)に参加し、フランスのロワール川とセヌ川の下流部を視察するとともに、各流域の水管理や生態系保護に関わる組織等を訪問し、それらに関する情報を得たので概要を報告する。

## 2. フランスにおける水資源の統合的流域管理

現在のフランスにおける水の管理体制は、1964年に成立した新水法(Water Law)の新しいコンセプト(適切な地理的単位、水の利用者・利用者の意志決定過程への参加、水資源の統合とグローバルなアプローチ、水の利用者と汚染者が支払う原則)から生まれたという。具体的には、水資源や水質保全等については、流域単位ごとに統合的管理が行われており、市長・議員、政府役人、水の利用者、各三分の一からなる流域委員会(The River Basin Committee)が設置され、そこでの決定事項を執行する水公社(Water Agency)が作られている。水公社の主な役割は水資源の統合管理や水質改善にあり、利用者や汚染者からの賦課金を財源に公社の運営や、市や工場・農場等の水質改善のための事業や工事等への技術協力や資金援助等を行っている。このほか、国が水に関する許認可等を、地方自治体またはそれらが集まった組織が給・排水施設の工事や管理、治水対策等を行っている。このような役割分担のもと、40年以上も前から水の統合的流域管理が行われてきている。

## 3. ロワール川

ロワール川はフランス最大の河川で、流路延長は日本最長の信濃川の約3倍の1,010kmである。ロワール川の中・下流域の川沿いには、中世以降の城が数多く残っている。どれも美しい河川景観と調和するように建てられており、世界の河川の中で唯一この地域が世界遺産となったことにも、自ずと納得させられた。

一方河口部では、土砂堆積に対処するため河床掘削を行った結果、塩水遡上が問題となっている。対策案として「可動堰の建設」「サンドバイパス」「新

水路の建設」の3案の検討が現在進められている。河口の生態系やサケ・ウナギの遡上等への影響も懸念されており、河口域の問題は日本と共通するところがあると感じた。



アンボワーズ城(左)と城内からみたロワール川(右)

## 4. セヌ川

セヌ川の河口域では、1960年代の波止場の新設や工業化の進行によって河口域の環境が大きく変化した。さらに近年、Le Havre港の拡大事業が計画され、自然環境への影響が懸念されたため、その代償として、また過去に消失した環境の再生のために色々な取り組みが行われている。主な内容は、①保護区の指定と管理、②鳥類等の休息地として人工島の建設や保護区内での草地・池の創出、③魚介類・両生類等のための沼地の復元などである。この自然再生のために、約4,600万ユーロ(約69億円)が投資されたとのことである。



セヌ川河口で再生された人工池(左)と沼地(右)

## 5. おわりに

今回の調査で、フランスにおける水の統合的流域管理、水辺景観・自然環境の保全や自然再生、ここでは省略したが洪水対策、完成すればロワール川河口からスイス、ドイツを経てハンガリーのブダペストまでがつながる自転車道など先進的な事例を幅広く学ぶことができた。

最後に、お世話になりました団長の高橋裕先生、団員の皆様、訪問先の皆様に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。